

H-4インドネシア語

956. インドネシアの言語

インドネシア行けば空港のアナウンスから始まり、ラジオ、TV から流れる言語はインドネシア語である。目に見える表示、看板などあらゆる文字はインドネシア語である。新聞、雑誌もすべてインドネシア語である。

しかしインドネシア語が首都だけでなくインドネシア全土で通じるようになったのは比較的最近のことである。30年ほど前はインドネシア語の通じない地域も存在したが、インドネシアは独立してインドネシア語を国語と定めてから学校教育でインドネシア語の普及の努めようやくその成果が表われてきた。

インドネシア人が日常的に話している言葉はジャワ語、スンダ語などの夫々の民族の言葉である。インドネシアの民族の数は約400といわれる。民族の数とは言葉の数のことである。国語としてのインドネシア語に対して各々の民族の言葉は“地方語”の位置づけとなりインドネシア人は二重言語生活を余儀なくされている。

国語のインドネシア語の強制的習得に国民から抵抗がないのはオーストロネシア語群(→563)の各言語の間には単語が異なる程度で言語の体系が同じであり、共通の語彙も多いので国語に違和感が少ないからである。

この点、パプア系(→626)民族にもインドネシア語を国語と定め教育しているが、言語体系も異なるためインドネシア語教育への抵抗が大きい。東ティモール(→431)では30年に及ぶインドネシア語教育にもかかわらず、分離独立とともにポルトガル語を公用語とし将来はテトン語(→222)を国語に採用の予定である。

インドネシアは単一の民族であるという建前から公式の民族別の統計数値はない。言語別の人口としてかなり古い数字であるが、ジャワ語6000万人、スンダ語2300万人、マレー(インドネシア)語1800万人、マドゥラ語700万人、ミナンカバウ語400万人となっている。マレー語にはインドネシア語しか話せないジャカルタ育ちの地方出身者の二世を含んでいるので必ずしも民族としてのマレー人ではない。

バンドゥンではインドネシア語で挨拶が済むとスンダ語で会話が始まる。スラバヤではジャワ語であり、マカッサルではブギス語である。インドネシアの大都会でインドネシア語だけの会話が一般的なのは首都ジャカルタとスマトラ島のメダン(→089)である。どちらも植民地時代に為政者によって建設された町で当初からコスモポリタンのであった。

現在、ジャワでは大人同士はジャワ語、子供同士はインドネシア語といわれる。大人でも敬語の使用がわずらわしい場合はインドネシア語になるらしい。ジャワ人とバタック人が結婚すれば会話はインドネシア語であり、その子供はインドネシア語を話し、親の言葉は疎遠になっていく。

957. インドネシア語の成立

オランダの植民地政策を振り返った際に、オランダ語を原住民に強制する言語政策を採用しなかった。この点、英語教育に比較的熱心であった英国の植民地支配とは異なる。

植民地支配機構の中でジャワでの言語世界は支配者の《オランダ語》、被支配者の《ジャワ語》、共通語の《ムラユ語》というように使い分けされていた。オランダ語を懸命に学びオランダ人以上に立派なオランダ語の

文書を書けるようになったジャワ人は植民官僚機構の中で疎外され、オランダ語を使用する機会のない地方に飛ばされたという小説があった。特に現地生まれのオランダ人にとってオランダ語は彼らの特権であり、オランダ語ができるジャワ人は特権社会への^{ちんにゅうしや}闖入者として疎まれたようである。

支配者であるオランダ人はジャワ人からはジャワ語の敬語(→633)で話しかけられる方が気分がよかった。オランダ人がジャワ人に話す際は粗野な言葉とされていたムラユ語である。また、ムラユ語は全植民地の共通語として便利であった。

ムラユ語は宮廷ムラユと市場ムラユの二つの系統がある。前者は由緒ある上品な言葉であるが文法が複雑である。市場ムラユ語は文法が簡単であり覚えやすいことから東南アジアのリンガ・フランカ(国際共通語)として使われていた。

オランダ人がオランダ語教育の必要性を感じた時はすでに遅かった。このようにある意味ではオランダに言語政策のなかったことが、結果的にムラユ語がオランダ領東インドの共通語となっていた。

市場ムラユ語は地域によって多岐多様であり統一言語でなかったが、その中でリアウ・ムラユ語が公用語として認められ、標準マレー語となった。ちなみに《ムラユ=Melayu》と《マレー=Malay》の使い分けは「ニホン」と「ニッポン」のような関係で同じ意味であるが、ムラユには土着的意味あいがあるようだ。

インドネシア語の母体であるマレー語は話し言葉である。話し言葉が文章言葉となるには支配階級周辺に位置するブタウィ人(→690)の存在が見逃せない。また民族主義者の多くはジャーナリスト、作家、弁護士、教師といった「言葉」を生業とする人々であり、彼らによりインドネシア語が形成され普及された。特にスマトラ島出身の文筆者の果たした役割は大きい。

太平洋戦争時に日本はインドネシア占領し敵性言語としてオランダ語を禁止し、インドネシア語の使用を義務づけた。教育や官公庁では大混乱をきたしたが、結果的にインドネシア語を国語として普及する基盤ができたことになり、占領者の意図せざる善政であった。

もしもジャワ語がもっと簡素で普遍的な言語であったならば、あるいはオランダ語がもっと早くから熱心に教育されていたならばインドネシア語は存在しなかったかもしれない。

インドネシアの民族分布は多様である。この多様な民族を「インドネシア人」と総括し、「インドネシア語」を国語とするナショナル・アイデンティティが地についてきた。

インドネシア語の語彙におけるオランダ語の影響は顕著である。西欧文明に起源のある事物はオランダ語である。オランダ語と英語は兄弟言語であり、語源は共通している。オランダ語の名詞は frustrasi(=フラストレーション), promosi(=プロモーション), motivasi(=モチベーション)のように「si」で終る。英語の「tion」で終る名詞を「si」の置き換えるとインドネシア語として通じる。

⇒606.ムラユ語

958. 国語の意味

「国語(バハサ・クバンサーン bahasa kebangsaan)」としてのインドネシア語の起源はムラユ語(→606)といわれたマレー語である。民族主義者によってこのムラユ語がインドネシア語として提唱されたのは次のような言語事情があった。

(1)東南アジア島嶼地域に勢力のあったスリウィジャヤ王国(→255)の言語であった

- (2)共通語の商業用語として東南アジア全体で使用されていた
- (3)マレー人が商人としてインドネシア各地に移住分散していた
- (4)文法が容易で学びやすい

マレー人はインドネシアにおける多数派ではないにもかかわらずこの言語が国語に採用されたのは、複雑な敬語体系を持つジャワ語(→633)にたいしてマレー語は“解放された”言語の位置づけになる。またマレー語は各民族集団にとって第二言語であり、多民族国家にとって中立的位置にあった。

マレー語を基盤とした国語としてのインドネシア語の形成は、すなわち、ナショナル・アイデンティティの形成であり、言語による民族意識昂揚となった。共通の一つの言語を持つという運動がインドネシア人としての自覚であり、インドネシア国の創設という政治運動に繋がった。

国語の重要性は1927年の「青年の誓い(→292)」で【一つの言語＝インドネシア語】として宣言されたように《インドネシア語》は《インドネシア国》と不可分であった。「インドネシアとはインドネシア語が教えられる所である」といわれるようにインドネシア語はナショナル・アイデンティティそのものであった。

インドネシア語は市場で通用していた市場ムラユ語ではない。マレー語を基に近代言語としてつくりあげられた人造言語である。1938年にインドネシア語会議が開かれ、近代科学技術を摂取するため外来語を利用することが決定され、外来語のインドネシア語化が行われた。現在なおインドネシア語は未完の言葉として、改良が続けられている。

独立後、インドネシアでインドネシア語が通用するようになった。インドネシアという国家は“虚構の想像体”ともいわれるような不思議な存在である。ある定義によればインドネシアとは「学校でインドネシア語の教えられる所」である。

インドネシアは憲法36条で国語をインドネシア語と定めている。ところで日本であるが、国語は日本語であること定めた法規はあるのだろうか。日本では日本語が国語であることは自明の理であるからわざわざ法で定める必要はないはずである。

世界では国語問題が大きな政治問題である国は枚挙にいとまがない。独立前の言語事情がインドネシアとよく似たインドでは自らの国語をヒンディー語と定めたが、その他に22もの指定言語がある。実際の公用語としては英語でもって代用せざるをえない。

フィリピンも然りである。カナダのケベック州独立問題、ベルギーにおいても言語問題は国の存在を脅かす深刻な問題である。

959. インドネシア語の普遍性

日本人にとってインドネシア語がやさしい理由、あるいはやさしそうに見える理由は

- ① ABCのラテン(ローマ)文字表記である。
- ② 若干の例外を除き同一文字は同じ発音である。合理的に考えられたラテン文字表記であるから発音も一文字一つであり、“e”についてのみ二つの発音があるので母音は6個であるが、大方は日本語のローマ字式に読めばよい。¹
- ③ 中国語との比較においても抑揚変化がない。単語にアクセントもない。子音と母音の組み合わせであ

¹ <編者註>ただしLとRの発音は峻別されていて間違えると異なる意味になる。Beli=買う、beri=与える。

り、子音単独の発音が少ないことは日本語と共通である。

- ④ 語順、時制等の文法が簡単である。動詞の例えば「行く」は過去形も未来形も「pergi」である。「昨日」とか「明日」という副詞を添えることで用は足りる。
- ⑤ 単語は素語の前後の接頭・接尾の接辞で増殖し意味合いが深くなる。文章にする際は接頭・接尾の接辞を駆使するが、会話は素語のままでも意味は通じる。
- ⑥ 「人」はオラン(orang)である。Orang-orang と言葉を重畳にすれば「人々」と複数の意味になる。

ムラユ語は交易語として普及したのは単純明快な発音と容易な文法にある。簡単に意志疎通できる言葉であった。

東南アジアでもタイ語はオーストロアジア系の言語で中国語と同系であり、インドネシア語とは別の言語である。タイ語には声調があり、無気音と有気音がある、その上文字は独特のタイ文字である。東南アジアの何かの言語を始めても良いと考える人にインドネシア語を勧めたい。いささか独断であるが、タイ語の労力の1/3もかからないはずである。「テリマカシ(ありがとう)」は東南アジア共通語になっている。

太平洋戦争の際にインドネシアへ行った兵の間で流行ったインドネシア語の語呂合わせ「飯はナシ(nasi)、魚はイカン(ikan)、菓子はクエ(kue)、人はオラン(orang)で、死ぬのはマテ(mati)」語呂合わせのインドネシア語は一度覚えると忘れない。

「好き:スカ(suka)、飲む:ミノム(mimum)、ある:アダ(ada)、笑う:ゲラゲラ(gelakgelak)、同じ:サマサマ(samasama)、名前:ナマ(nama)」も語呂が良く日本語に通じる。

「雨は猛烈な勢いでジャンジャン降るから hujan、光は kilat、乳房 susu、飽きるは kesal、掘るは gali、切るは potong、戻るは mundur、取り替えるは tukar」などもある。

会話としてのインドネシア語はやさしいが、格調ある文章のインドネシア語はかなり難しい。要するに奥行きのある深い言語である。

スピーチを聞いていてもインドネシア語にはメリハリをつけた表現が可能である。スカルノ大統領はインドネシア語の演説(→974)の素晴らしさを証明した。スカルノのカリスマ的演説が大衆を酔わせた。観察子によれば村の結婚式での村長の祝辞でも日本の国会議員の演説より数段うまいそうだ。²

960. 文字の変遷

インドネシア語の文字は ABC のラテン(ローマ)文字表記である。インドネシア語が学びやすい言語である理由として文字に抵抗がないことである。しかしインドネシアの文字の歴史は変遷を経てきており、インドネシア語と地方語という言葉と同様にラテン文字、ジャワ文字、アラビア文字の多文字が併用されている。

インドネシアの文字の歴史をたどると、最も古い碑文はクタイ王国(→266)のムラワルマン王、西ジャワのタルマ王国(→260)のものである。中部ジャワでは9世紀に遡るジャワ語の古い石碑が現れる。何れも南インドの影響を受け東南アジアで使用されたパッラワ文字³であり、元はブラフミー系である。10 世紀頃よりカウィ文字

² <編者註>仕事上の会議でも雄弁に話す人が多いが、そのほとんどの内容は希薄である。

³ パッラワ(Pallawa)文字はインド系文字のうち南インドに栄えたパッラワ王国の経典文字に由来する。Pallawa はパッラワ以外にパラヴァ、パッラヴァ、パッラバなどの記載がある。

い。

インドネシア人一般に言えることは文字を書くのがうまいことである。サインをインドネシア側と並べて行くと日本側のサインは見劣りする。彼らの芸術的才能のあらわれであろうか。

961. マレーシア語との差

インドネシア語は東南アジア島嶼地域に商業語として通用していたマレー語を国語としたものであるが、マレー語そのものではなくマレー語を基礎にして品格を高めた人造語である。国語の品位を維持する作業は今日も継続している。

一方、マレーシアもマレー語をマレーシア語として国語に制定したが、1972年にインドネシアとマレーシアは協定により用字の整合を計り、ラテン字綴りを統一化した。この結果、従来インドネシア語に採用されていたオランダ方式の綴りはマレーシア語の英語方式に変更されることになった。

例えばスハルト大統領の綴りは[Soeharto→Suharto]になった。前大統領のスカルノは[Soekarno→Sukarno]である⁵。首都ジャカルタは[Djakarta→Jakarta]である。ところで Djakarta はさすがに古い本でしか見かけないが、Soeharto と Suharto は今日も混在している。アメリカ、シンガポール、香港などの外国雑誌では Suharto であるが、インドネシア国内の雑誌では依然として Soeharto である。この辺は「国」と「國」が併存している日本と同じことなのであろう。

マレーシア語との関係ではインドネシア語は綴りでは譲歩したが、これによってマレーシア語のインドネシア語を取り入れて語彙が豊富になり、マレーシアにインドネシア語が抵抗なく受け入れられるようになった。

ただしインドネシア語・マレーシア語の間には語彙の意味が異なることもあるから注意が必要である。例えばインドネシア人が“課長”の積りで kepala seksi と名乗るとマレーシア人は大笑いになったそうだ。その訳はインドネシア語の seksi はオランダ語の sectie (英語の section) である。マレーシア語の seksi は英語の sexy である。

マレーシアとインドネシアは植民地体制で英国とオランダに分れたが、元はピーナッツのような同一の文化である。今日ではマレーシア語のインドネシア語化傾向が見られ、将来マレーシア語がインドネシア語に吸収されることも予想される。

さらにインドネシア語は ASEAN の共通語⁶になる可能性が考えられる。何故ならシンガポール憲法(→463)はマレー語を国語と定めている。ブルネイ(→186)では名実ともに国語はマレー語である。フィリピンでは英語が使用されているが、国語のタガログ語はインドネシア語と同系のオーストロネシア語群(→563)である。

そもそもインドネシア語はリアウ・マレー語(→606)である。日本の外国語大学も戦後【マラヤ語】の看板を【インドネシア語】に掛けかえただけである。

マレーシアではマレー語を国語としているが、中国人とインド人が半数近くを占める人種構成では政府の

⁵ インドネシア大統領スカルノ大統領とスハルト大統領旧綴りと新綴りをインターネット google の検索したヒット件数は下記のとおりである。

	旧		新
Soekarno	79,000	Sukarno	84,600
Soeharto	99,800	Suharto	323,000

⁶ 世界で使用人口の多い言語の順位は①英語、②中国語、③ヒンディ語、④スペイン語、に次いで⑤がインドネシア語である。

努力にもかかわらず国語の普及は今一つで、むしろ共通語として英語のウェイトが高い。国語のマレーシア語は長らく名目にとどまっていた。マレーシアのマレー人にインドネシア語で話しかけると嬉しそうな返事がかえってくる。

⇒462.同族のマレーシア

962. パントウン詩

古典マレー文学には歴史や物語を語るヒカヤット(hikayat)という韻文の叙事詩がある。シャイール(sysir)も4行からなる連が数百と連なる韻文であるが、シャイールの起源はアラビア語でありややフォーマルである。一方、パントウン(pantun)という民謡はマレーの地に生まれた民衆の感情を謡うものである。日本でいうならば奈良時代の漢詩と和歌のような位置づけらしい。

何れにしてもこのような優れた古典文学の存在はマレー人が文学性豊かな民族であることの証^{あかし}である。インドネシア語は人造語であるが、詩として美しい響きのある言葉であり、インドネシア語はマレー語の遺産を引き継いだ。

パントウンという四行詩の前2行は前句であり、後2行が本句である。1行と3行、2行と4行に各々韻を踏む。前句と本句は日本の連歌の付合の要領で付かず離れずという関係であり、名句といわれるものは語路合せと比喻が巧みに織りこまれているものが多い。

Asap api embun berderai 煙が立ち、露は野山に、
Cacak galah haluan perahu へさきで竿をたてよう。
Hajat hati tak hendak bercerai お前とは別れたくない、絶対に
Kehenda kAllah siapakah tahu だが、アッラーの御心をだれが知ろう
(出所:吉岡一彦訳編「パントウン(マレー民衆の唄)」花神社 1988)

パントウンはマラッカ王国時代からマレー人に歌い継がれてきた伝統芸能である。『ハントウア』というマラッカ王国の英雄を描いたマレー映画ではミュージカルのようにパントウンが歌われた。もてる男の条件はパントウンのうまいことである。日本人が俳句をできる程度にマレー人なら折にふれていくつかのパントウンをやりとりできる。

若者のパントウンは愛の歌であり、老人のパントウンはイスラムの教や慣習や生活の知恵である。子供のパントウンは遊び唄、子守唄、謎謎である。

パリアンはジャワ語のパントウンである。スンダ人のセセブレはスンダ人のスンダ語のパントウンである。ジャワ語やスンダ語の韻文は地方文化の位置づけになる。これに対してマレー語のパントウンはインドネシア語になり普遍性を持つ。

マレー語＝インドネシア語は音声が美しい言葉であり詩になる。アミルハムザ(→323)はインドネシア語のリズム溢れる詩を書いた。インドネシア語の詩の朗読の伝統はレンドラ(→992)に引き継がれている。

インドネシア映画でアチェ戦争を描いた『チュッ・ニャ・ディン(→341)』に従軍詩人が登場した。詩人は戦士ではない、戦中の合間に即興の詩を朗々と詠唱し兵士を勇気づけるのが仕事である。インドネシア民族に詩

の詠唱は伝統的所産である。

⇒991.インドネシア語近代詩

963. サンスクリット系語彙

インドネシア語はインド文化の影響を受け言葉にサンスクリット系の語彙⁷を含んでいるが、言語構造は別体系である。日本語の語彙に中国語が多くても別体系の言葉であるのと同じ関係である。ポリネシアに拡がる台湾の高砂族やミクロネシアの言葉はオーストロネシア語族(→563)に属するが、サンスクリット語の語彙は含まれていない。インドネシア語とはオーストロネシア語の文法体系を骨格にし、筋肉としてサンスクリット語の語彙の付着した言語といえよう。

日本語の“旦那”の語源はサンスクリット語のダーナ(与えるもの、お布施)で仏典の音訳で旦那になった。インドネシア語の“dana”は基金とか施しを意味し、遠く古代インドから日本とインドネシアへ同じ言葉が別れて伝わった歴史の偶然の一致である。

跳梁跋扈したオウム真理教の使用していたグル=尊師(Guru)、カルマ=人間の運命(Karma)はサンスクリット語⁷でそのままインドネシア語である。

インドネシア語の数値の sato=1、dua=2、tiga=3はオーストロネシア語系であるが、eka=1、dewi=2、tri=3、panca=5などサンスクリット語も数値が併用されている。

特に思想とか哲学分野の抽象語はサンスクリット語に由来している。例えば cinta(愛)、ajar(知恵)、negara(国家)、negeri(国)、bangasa(民族)である。サンスクリット語の名詞には男性形と女性形があり、インドネシア語自体にない特徴である。pemuda(男性青年)と pemudi(女性青年)、putra(王子)と putri(王女)、dewa(男神)と dewi(女神)、mahasiswa(大学生)と mahasiswi(女子大生)などである。⁸

サンスクリット語の地名は、シンガポールは Singa(ライオン)+Pura(町)であり、リアンのジャヤプラ Jayapura は勝利(Jaya)+町(Pura)である。

インドネシア国家の基本理念の 5 原則を意味するパンチャシラ(→365)はサンスクリット語である。国家スローガンの“多様性の中の統一”のビネカ・トゥンガル・イカ(→367)もサンスクリット語である。サンスクリット語は神秘性をもった表現として支配の正統性の権威付けのために使用されたが、新生インドネシアにおいてもこの伝統が引き継がれている。造語においてもインテリはサンスクリット語系の言葉を使いたがる。明治維新後の日本語の変革期において西洋文明の到来に漢語の造語が盛んに行われた。

イスラム教の浸透とともにアラビア語も入りインドネシア語には多くのアラビア語が取り入れられている。さらに植民地時代の宗主国のオランダ語もインドネシア語に取り入れられた。学術用語、法律用語には多くのオランダ語がそのまま取り入れられている。

最近のインドネシア語の乱れは安易な外国語の使用である。特に英語の影響が強い。インドネシア語の表

⁷ その他のサンスクリット語源のインドネシア語は次のとおり。

bahasa (language)、berita (news)、budi (reason)、bumi (earth)、cahaya (light) cakrawala (horizon)、dharma (duty)、desa (village)、guna (use, purpose) guru (teacher)、karya (work)、kepala (head)、kerja (work)、nama (name) negara (country)、pustaka (book)、rasa (emotion)、sastra (literature) utara (north)、warna (colour)

⁸ <編者注>その他に karyawan(男子従業員)と karyawati(女子従業員)があるが sariawan には女子形がない。なぜなら口内炎のことだからだ。

現があるにもかかわらず外国語を使用したがる。日本語の問題と同じである。固有名詞に外国語を禁止する行政指導が行われた。《Skyline Building》をインドネシア語《Merena Cakrawana》と言い換えたが定着していない。

⇒981.底流のインド文化

964. シンカタン/略語

インドネシア語の表記で注目されるのは略語が多いことである。例えば新聞記事に“G30.S/PKI”というのを見かけた。初めて見ると何の符号かと途惑うが、「Gerakan 30 September/Partai Komunis Indonesia」の略語であって1965年に起きた「共産党による9月30事件(→384)」というクーデター未遂事件のことである。「K-5」はカキリマ(→858)のことである。

長い固有名詞は「シンカタン(singkatan)」という略語⁹で短くいう。インドネシア共和国は RI、ジャカルタ特別州は DKI、家族計画 KB、身分証明書 KTP である。名詞のみならず慣用句もシンカタンになる。例えば ABS 主義は「asal bapak senang=直訳(上司がよろしければ、意識=長い物にまかれろ)」である。

日本でも法律名や組織名は略語が使用される。大阪人は略語が好きであり梅新(梅田新道)、上六(上本町六丁目)、天六(天神橋6丁目)という地名の略語が定着している。日本の略語は漢字のメリットで意味が分かる。

漢字と異なりラテン文字のインドネシアのシンカタンは意味が分からない。溢れるシンカタンのためインドネシア人もシンカタン辞典が必要である。本 10 巻末に「インドネシア専科」全巻に記載のシンカタンを収録したが、日々新しいシンカタンが生まれるし、陳腐化するのも早い。

若者は不必要にまでシンカタンを造語して仲間内で隠語のように用いるのをバハサ・ガウル=Bahasa Gaul(仲間語)という。例えば「WIL=Wanita Idaman Lain」は結婚相手以外の女性の愛人のことである。PIL は男性である。日本語の略語にも「タナボタ(棚からボタ餅)」や「ドタキャン(土壇場のキャンセル)」など辞書にない言葉が横行している。

プロクム(prokem)はアンダーグラウンド世界の隠語が若者言葉として使われるようになった。ルプス小説(→163)の主人公の使うジャカルタ弁が若者言葉である。プロクムの発信地はジャカルタのブロックMであることから「bahasa prokem(プロクム語)」は「bahasa blockM(ブロックM語)」といわれる。

日本でいう「ドヤ」のように逆さ言葉も若者に隠語として流行している。マラン(→148)の流行がジャカルタに定着したものらしい。語呂がよい単語を切りつめる。例えば sudah を udah、enggak を ngga という。日本語のムショ、サツ、ブンヤ、ドヤ、デカと同じである。

比喩を込めたシンカタンの言い換えはプレセタン(plesetan)という。例えば DPR は「Dewan Perwakilan Rakyat」の略で「国会」のことである。それを庶民は「Dibawah Pohon Rindang(木陰の下で)」という。インドネシアの日中に木陰の下で物売りがしていることは日本の議員先生からも類推の通りである。

KUHP「Kitap Undang-undang Hukum Pidana(刑法法典)」は「Kasih Uang Habis Perkara(お金を払えば万事が解決する)」になる。

⁹ 略語はシンカタンとアクロニムに分けられる。シンカタンはローマ字の組み合わせであるが、アクロニムは意味が推定できる語句である。

965. ジャーナリズム

日本の週刊誌相当の紙を使用した分厚い新聞と比較するとせいぜい 8 ページのインドネシアの新聞は貧弱である。しかし日本はパルプの輸入国であり、インドネシアは輸出国であるという厳然たる事実がある。

現代インドネシアのジャーナリズムの筆頭の『コンパス(Kompas)』は知識人層を対象にしておりインドネシアのクオリティペーパーである。1965 年創刊、オーナーはカトリック系で 55 万部である。『スアラ・プンバルアン(Suara Pembaruan)』はプロテスタント系、33 万部である。『レプブリカ(Republika)』は 1993 年刊行のイスラム知識人協会(→405)が発行するイスラム系日刊紙である。その他にゴルカル系(→393)の『スアラ・カルヤ』、国軍系の『Angkatan Bersenjata』がある。

『ポスコタ(PosKota)』は大衆紙で最大部数を発行、派手なカラー写真を使い、センセショナルな報道を行う。日本でいうスポーツ新聞である¹⁰。インドネシアの新聞発行部数は人口に比して多くない。経済的余裕がないこともあるが、口承文化(→586)の国民性であるから印刷物にそれほどの価値を置かないからであろうか。

植民地時代に叢生したインドネシア語新聞は、オランダの弾圧にもかかわらずインドネシア知識層に受け入れられ民族主義の色彩を帯びていた。インドネシアの民族意識とインドネシア語の普及とインドネシア語新聞の勃興は一体であった。

独立後、インドネシア語新聞は全国に浸透するようになったが、スカルノ時代、スハルト時代を通して独裁体制ではテンポ発禁事件(→752)のように官製の招待ジャーナリズムしか存在を許されず、政治改革の原動力にはなりえなかった。

しかしインドネシアにも不屈のジャーナリストがいた。モフタル・ルビス(Mochtar Lubis 1922-2004)は『ジャカルタの黄昏』『果てしなき道』(1952)、『ジャカルタの黄昏』(1963)、『虎！虎！(→067)』(1975)などの秀作から作家として知られているが、彼の神髄はジャーナリストである。西スマトラ州のパダン生まれで、革命期にアンタラ通信の記者として戦闘的ジャーナリストであった。

1954 年に『インドネシア・ラヤ』を創刊しスカルノ政権の独裁性と汚職を批判し、スカルノの女性問題にも筆誅を加えた。このため『インドネシア・ラヤ』は発行停止にされ、1956 年からスカルノ失脚まで 10 年間は投獄、軟禁の繰り返しであった。

9 月 30 日事件(→384)後、釈放され、1966 年以来、文芸誌『ホリゾン』を主宰している。しかしスハルト政権に対してもジャーナリストとしての権力者の不正と専制、社会の腐敗に対する憤る使命は衰えることはなかった。アジアの誇るジャーナリストとしてしばしば日本へ訪問¹¹した。

近年のジャーナリズムを巡る話題はインドネシア版『Playboy』が発刊されたが、FPI(→753)の反発でジャカルタでの刊行を停止したことである。

⇒752. 報道規制

966. 日本語との関連

日本語は世界の言語体系の中でその位置づけが難しい言葉であり、系統がはっきりしないままとりあえず

¹⁰ <編者註>Pos Kota は平易なインドネシア語を使っているので初心者にとって読みやすい。

¹¹ 2004 年のモフタル・ルビスの死去に対しマハプトラ勲章が授けられた。

ウラル・アルタイ語族とされている。日本語とオーストロネシア語族(→563)の関係も研究されており、日本語＝オーストロネシア語族説もある。

沖縄の方言にオーストロネシア語の要素が見られる。「マタハーリス・チンダラ・カヌシヤマヨー」はよく知られた沖縄民謡『安里屋ユンタ』の一節である。これにインドネシア語を少しでもかじったことのある人ならば知っているインドネシア語の単語をはめると「マタハリ(matahari)＝太陽」「チンタ(cinta)＝愛する」「カミ(kami)＝我々」「サマ(sama)＝同様に」である。「マタハーリス・チンダラ・カヌシヤマヨー」は「太陽は我らを平等に愛する」という意味になる。

言葉の片言節句だけではない。沖縄民謡のエキゾチックな旋律・リズムの文化的背景は南方系であろう。

「メラ(merah)」はインドネシア語の「赤」である。日本語では火はメラメラと燃えるという。このメラの語源はインドネシア語にあるのでなかろうか。¹²

ところで日本に「メラ」という地名が若干ある。千葉県南端の布良は海食台地にある。語源は海草が繁茂することから布浦がメラになったという。伊豆半島の南西岸の妻浦は女神を祭ることにちなむという。和歌山県の田辺にある天神崎近辺にも目浦がある。語源は角川日本地名大辞典によるものであるが、注目すべきことは何れも岬の突端である。

しかし私は太平洋の黒潮に乗って航行するインドネシア人がメラと名づけたと空想する。メラとは赤土の崖に違いない。ロマンのためにはメラの近辺を探索して赤土の崖を確認せねばならない。ところがそう都合よく赤土の崖があるわけではない。千葉県の布良には白浜海岸があり白い浜が印象的である。残念ながら「メラ＝赤土の崖」は実証されていない。¹³

西洋ではカノープス(Canopus)といわれる南の水平線に見える一等星がある。東洋では「長寿星」といわれるのはなかなか見られないからである。マグロを追いかける日本の漁夫はこの星を「メラ星」と名づけた。遭難した漁夫の霊魂であり天候の異常の予兆として畏れた。メラ星はいうまでもなく赤い輝きである。マグロ漁業⇒南の海⇒メラ星の連想は南方文化に行きつく。

阿蘇山、浅間山は煙たなびく活火山である。インドネシア語の煙は「asap」である。インドネシア民族は火山の煙を求めて航海にでた。北の島に火山を発見して「asap」と言った。それが阿蘇山、浅間山の語源でないかと想像をめぐらすことは楽しい。

英語の Eye の日本語は「目(め)」である。しかし目のことをまぶた、まつげ、まなこ、まのあたりというように「ま」と併用されている。ところでインドネシア語の目は「mata」である。Mata はインドネシアのみならず太平洋地域、すなわちオーストロネシア語族の共通語である。「ま」は日本語におけるオーストロネシア語族の形跡である。日本語の起源にオーストロネシア語の存在¹⁴を認める言語学者が崎山理氏である。

¹² <編者注>日本語のオノマトペにはインドネシア語と同語源と思われるものが多々ある。前出のめらめら=赤だけではなく、メチャメチャ=memecah(粉々に砕ける)など。

¹³ <編者注>火のことを mera と呼んだものかもしれない。あるいはスメラのメラなのかもしれない。また地名には駿河=surga 天国、～平=daerah 地域、金毘羅=Gembira 喜び、阿波=awak 私などなどがある。

¹⁴ 日本語のベースにおけるオーストロネシア語の影響とともに、近代になって導入されたインドネシア語がある。江戸時代の長崎にはオランダの商館があった。バタビアの出先機関であるためインドネシア人の従者もいたであろう。チャンポンは料理の実態からインドネシア語のチャンプルーであろう。チャンポンの自家は長崎である。アンボンタン語の語源は長崎の商館でインドネシア人がオランダ人に怒られて「アンブン・トゥアン(ご主人様、許してください)」と詫言っている光景からきたという説がある。

967. 日本語の片言隻句

インドネシア語は外来語を容易に取り入れる。その中には日本語もある。日本は占領中に多くの言葉をインドネシア語に残した。中には次のような挿話もある。

日本人がたまたま辺境の地を訪れると日本人と知った相手から「バックヤロー」という言葉を浴びせられたが、相手はニコニコしていた。その理由は日本が太平洋戦争でインドネシアを占領した際に日本兵は沿道の住民に「馬鹿野郎」と叫んだ。これを聞いた方は挨拶語と信じていたからである。

占領中の日本が残した言葉には^{じくじ}忸怩たるものがある。その最たる Romusha = 労務者(→305)はインドネシア語辞典にも記載されている。その後はインドネシアと経済的な係わり合いが強くなり、その方面の日本語がインドネシア語されつつある。

インドネシアでよく知られている日本語の語彙も日本文化の理解のされ方を示しているので下記に列挙した。

arigato(ありがとう)、bakayaro=bagero(馬鹿野郎)、bushido(武士道)、domo(どうも)、geisha(芸者)、geta(下駄)、harakiri(腹きり)、heiho(兵補)、hiragana(平仮名)、ikebana(生け花)、jibaku(自爆)、judo(柔道)、kabuki(歌舞伎)、kamikaze(神風)、kampai(乾杯)、kanji(漢字)、karate(空手)、katakana(片仮名)、kenpeitai(憲兵隊)、kimono(着物)、kohai(後輩)、nemawasi(根回し)、noh(能)、romusha(労務者)、sake(酒)、sakura(桜)、samurai(侍)、sayonara(さよなら)、seinendan(青年団)、seitai(政体)、sekigun(赤軍)、sempai(先輩)、sogoshosha(総合商社)、sukiyaki(すきやき)、sumo(相撲)、taisho(大将)、takeyari(竹槍)、tempura(天麩羅)、TennoHeika(天皇陛下)、waka(和歌)、yakuza(やくざ)、zaibatsu(財閥)出所梅棹忠夫・小川了編「ことばの比較文明学」

オランダと戦った独立戦争でインドネシア軍隊では故意に日本語の軍隊用語を使った。例えば「進め！」「突っ込め！」「バンザイ！」などの日本語が聞こえるとオランダ兵は日本の兵隊と思いこみ急いで逃げるといふ効果があったそうだ。

さて最近のインドネシアでの日本語熱は相当なものである。若い女性が多い。多くの大学に日本語学科がある。日本語を第二外国語にしている高校もある。韓国、中国、台湾、オーストラリア、米国について日本語を学ぶ人が多い。動機は日本企業に勤めて高収入を得たいからであろう。観光・カルチャー関係にも日本語が幅をきかせている。

日本語がそれだけ盛んならば日本人には日本語教師¹⁵の口がありそうであるし、現に必要とされているが、日本人にビザは容易に発行されない。インドネシア人の日本語教師と競合するからである。

一時インドネシアで営業する企業名の外国語をインドネシア語に改めるように行政指導があった。その際に西武百貨店だけは何ら問題¹⁶が無かった。何故なら「se-ibu」は「お母さんだけ」という立派なインドネシア語である。

¹⁵ 大学へは国際交流基金からインドネシア人の日本語教育に派遣された教師の報告に日本語教育の実態が記されている。百瀬侑子「ジョグジャ雑記」2002 つくばね舎

¹⁶ インドネシア政府が向きになって改名を言ったのも半年くらいで沙汰ヤミになった。一貫性のないところがインドネシアらしいところである。ちなみに西武百貨店もその後、インドネシアから撤退した。